

# NCGG Seminar

## 遺伝子改変マウスを用いたセプチン系の生理機能と病態へのアプローチ

名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻  
教授  
木下 専 先生

酵母からヒトまで保存された重合性GTPaseファミリーの1つであるセプチンのヘテロポリマーは細胞表層分子の足場や拡散障壁となる一方、アクチンや微小管と協調して細胞分裂など多彩な生命現象に関与する。ヒトのセプチンSEPT1-14の多くが神経系で高発現すること、優性変異型SEPT9が遺伝性神経痛性筋萎縮症 (OMIM 162100)の責任遺伝子であること、SEPT4がシヌクレイン病で見られるLewy小体の副成分であること、SEPT5/6/11が統合失調症や双極性障害患者の死後脳で蓄積することなどが知られているが、いずれも意義やメカニズムは不明である。これらの謎を解く糸口を求めて作製したセプチン遺伝子改変マウスから得られた知見を紹介する。

平成24年4月20日(金)午後4時  
第二研究棟二階会議室